

陶芸技法の研究

～身近な道具やものによる加飾について～

池内麻依子*・河野 令二

A Research on Ceramic Techniques
～The Decoration of Ceramics with by familiar tools～

IKEUCHI Maiko*, KOUNO Reiji
(Received January 15, 2008)

キーワード：加飾、型押し、身近なもの

はじめに

装飾は、動植物が生存していくために目立たせる必要があり、発展してきたものである。自然界の中で他のものから区別するために行われたことが起源であると言われている。山崎正和の『装飾とデザイン』によると、装飾は先史人が巨木や奇岩を一つの個物として意識し、それを他から聖別するため、印をつけていたことが始まりであり、当時、一つの特定の場所を聖別することも装飾によって行われていたと述べられている。

装飾をすることによるメリットとは、まず華やかになることである。さらにどのような装飾をつけるか考えることによって創造力が鍛えられること、自分独自のオリジナリティ(他とは違う特別なもの)を生み出すことができ、作るときの楽しさが増すこともメリットである。しかし、バランスの考えられた装飾でなければ受け入れにくくなる。

焼き物の技法である加飾とは、器物の表面にさまざまな技法を用いて装飾を加えることである。加飾には素焼きの前に行うものと、素焼き・本焼きの後に行うものがあり、平面的な加飾の方法と立体的な加飾の方法がある。

今回は身近な道具を使って、素焼きの前に立体的な加飾を施す型押しという技法の可能性を探っていこうと思う。

1. 陶芸の中の装飾技法

陶芸の技法には、素焼きの前に施す装飾と、素焼き後に施す装飾とがある。

トニー・バークス著の『陶芸技法の手引き』によると素焼き前の装飾には以下の様なものがある。

- ・粘土にシャモットを混ぜる→肌合いが変わる。

*山口大学大学院教育学研究科修士課程教科教育美術教育専修

- ・粘土にコルクを混ぜる→焼け跡で表情が変わる。
- ・粘土の色を変える→①めのう模様・・・濃い色と薄い色の粘土を重ねたベーコンのような模様が特徴的である。②ネリアージュ・・・濃い色薄い色の粘土の板を何層か重ね合わせ、これを縦に同じ幅でスライスし、さらに横に広げて並べ、模様のついた粘土板をつくる。③濃い色と薄い色
- ・型押し→まだ柔らかいうち(生乾き)に、表面にスタンプや様々なものを押し型押しの装飾を施す。石膏や木、針金などで自分オリジナルのスタンプをつくることができる。また自然のものを押すこともできる。スタンプを押す圧力で粘土地が伸び、割れてしまったり変形してしまうことがある。そのため、サイズが厳密にそろってなくてよいもの、表面が平らでなくてよいものに使うべきである。型押しのデザインは施釉するとより一層強調される。酸化物をかけると刻印の溝に入り、模様を浮き立たせる。釉をかけると、凹凸部分の縁が何種類か違った色に変化し、柔らかい感じに仕上がる。

今回は、この型押しを工業製品を中心に行った。

- ・貼り付け→作品の表面に粘土を貼り付けて加飾する。
 - ①スタンプ ②貼花装飾
- ・彫刻→作品の表面に模様を掘り込む。
- ・透かし彫り→透かし彫りを施す。
- ・面取り→肉厚の円筒形の表面を生乾きの時に刃物や針金で切り取り、面を作り出す。
- ・しのぎ→厚めに形成した作品の外表面に、螺旋状や垂直な浅い溝を作って装飾する。
- ・飛びカンナ→粘土が柔らかいうちにバネのような金属片をゆっくりと回転する轆轤上の作品にあて、表面に模様を施す。
- ・象嵌→彫刻刀などで作品の表面に模様を彫り、そこに着色した粘土を埋め込む。
- ・化粧土を使う装飾→生乾きの作品に、釉薬のような液体状の装飾用粘土を流しかけ、それに透明釉を掛けて仕上げる。
- ・掻き落とし→鋭い道具で化粧土を削って下地とのコントラストを出す。
- ・化粧土を刷毛で塗る方法→先がモップのような大きな刷毛で化粧土を塗る。

2. テストピースについて

身近にある様々な道具やものを中心に型押しするにあたって、粘土をローラーで伸ばし、10cm×10cm、厚み7mmの正方形の粘土板をテストピースとし、それに型を押しした。自然物14種類、工業製品55種類を試した。

3. 加飾に使う道具や物とその効果

①自然物

- ・貝殻(巻貝、二枚貝、カキ) → 押す、転がす

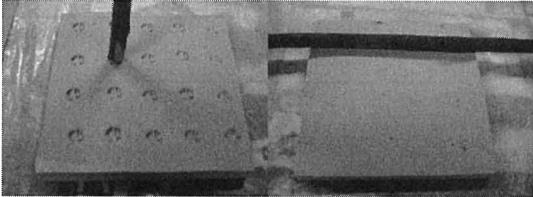


巻貝のねじれている部分を押し付けたら「の」の字ができた。

二枚貝は貝の輪郭の部分を押し付けたらギザギザ模様になった。

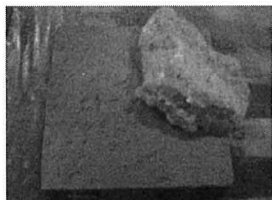
様々な種類の貝を押し付けたらいろいろな凹凸のパターンができる。

・枝 → 押す、転がす



折られた木の不規則な断面部分は、木の繊維があり、押し付けたらその凹凸が出た。いろいろな断面、Y字型の枝や太い枝など、形によってできる模様は違って来る。

- ・石(でこぼこ) → 押す、



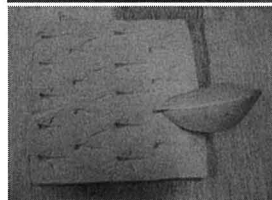
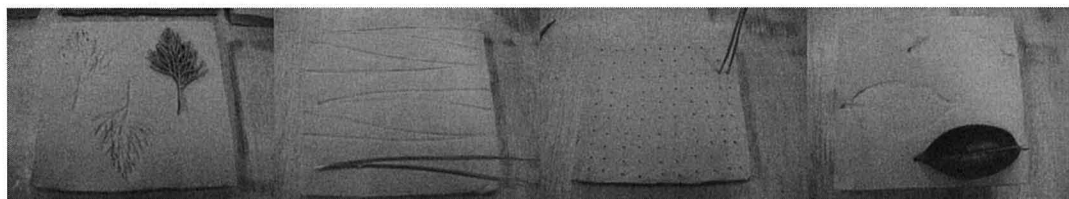
石は、尖っている部分ははっきりと型が出た。粘土版全体に石の表面を押しした。他にも丸い形の石など様々な形がある。

- ・落ち葉 → 押し付ける、



落ち葉は、曲がったまま乾燥していたため、粘土版に形をうまく押し付けることができなかった。

- ・葉 → 押し付ける、



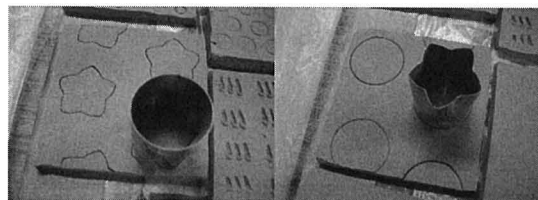
② 工業製品(市販されている道具)

- ・ペットボトルのふた → 押す、転がす、



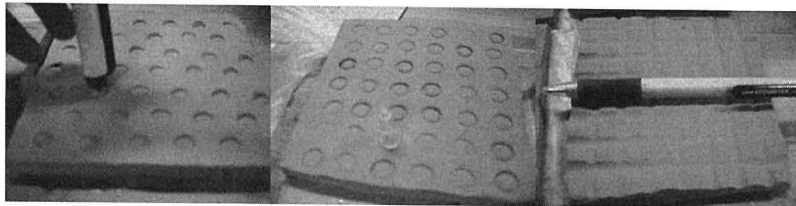
ふたを横に転がすと、^{わだち}轍のような跡がつく。

- ・型抜き

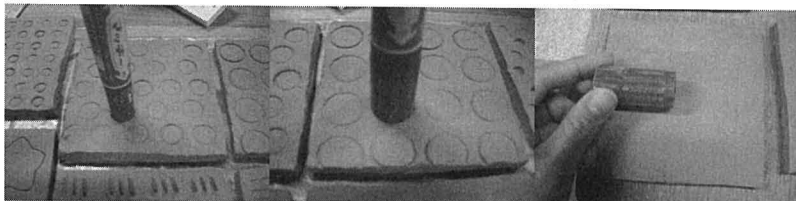


型抜きは、模様がきれいに出た。とても整っている。
薄い板などで型を作れば同じような効果のものが作ることができる。

・ボールペン → 押す、刺す

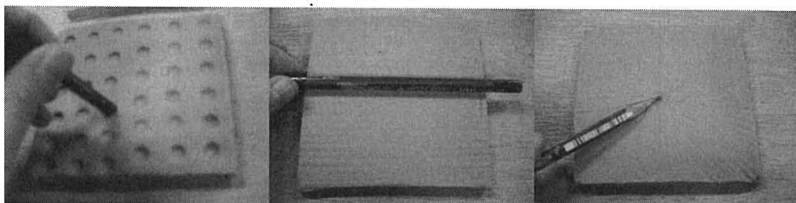


・油性マジックのキャップ → 押す、転がす、

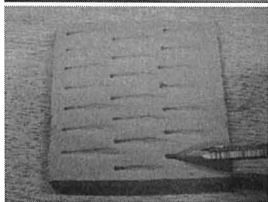


ペンのキャップに縦にラインが入っているのので、転がすと連続した模様になった。

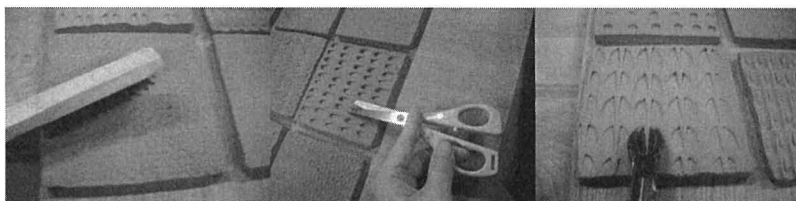
・鉛筆 → 押す、転がす、刺す、



鉛筆の先端の位置を中心にしながら転がす。

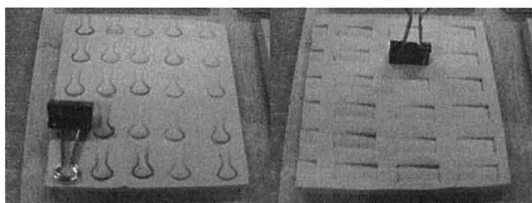


・金属ブラシ → 押す ・はさみ → 押す ・くぎぬき → 押す、転がす、



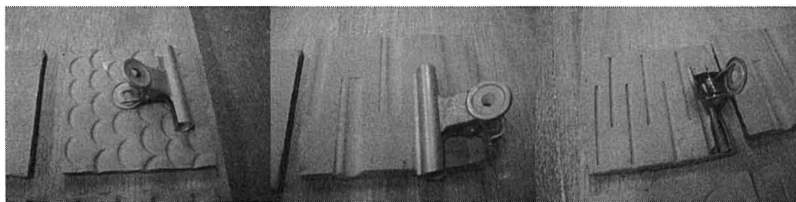
くぎ抜きとはさみの型は似ている。もち手や、押さえる部分の角度を変えることによって模様を変えることができる。

・ダブルクリップ小 → 押す、

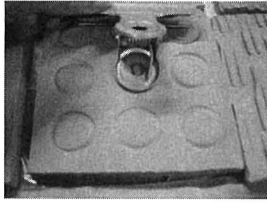


クリップは型が特徴的になり、おもしろい。

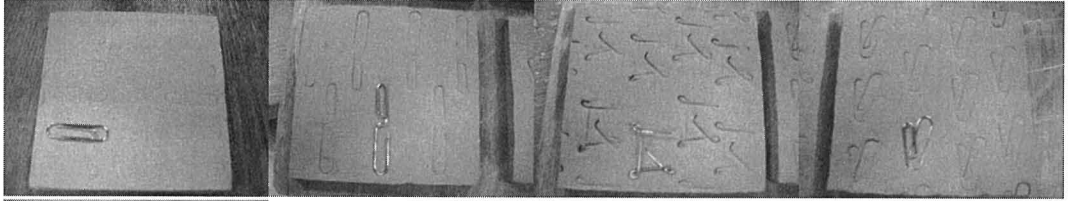
・目玉クリップ大(金属) → 押す、刺す、



もち手の部分を連続して押すと魚のうろこみたいである。先端を押すと、尖った溝ができる。

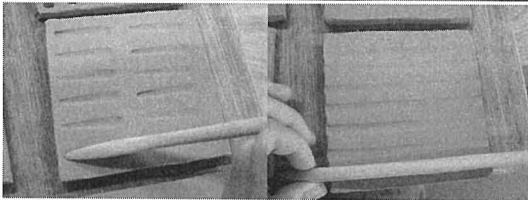
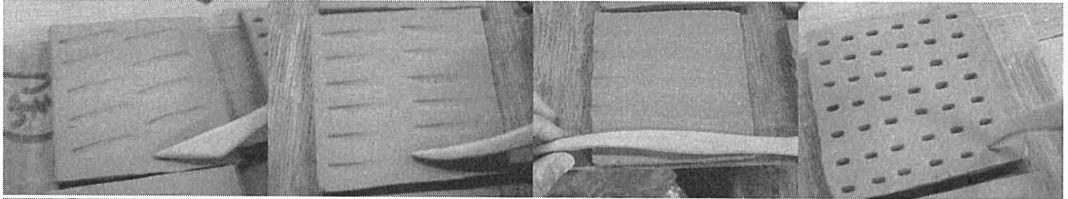


・ゼムクリップ



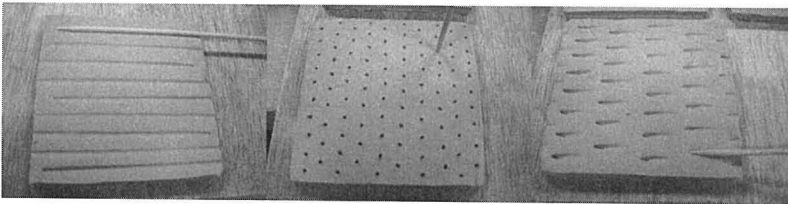
他のものに比べて細い線の溝ができる。クリップ自体を曲げて変形して型を作ることもできる。

・粘土べら → 押す、

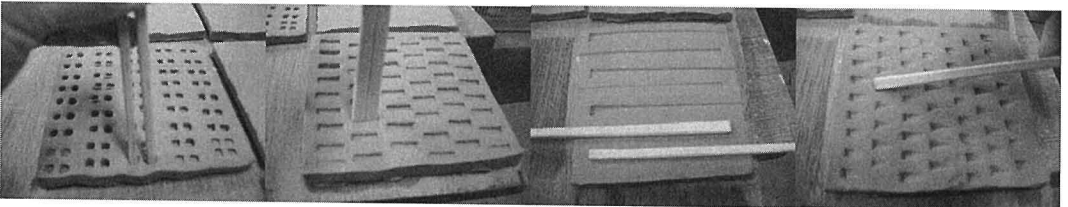


粘土べらは太い部分、細い部分があり、横にして押すとゆるやかな波のような模様ができる。

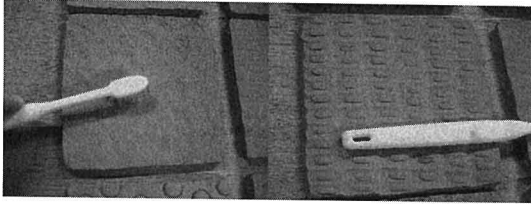
・竹串 → 転がす、刺す、



・割り箸 → 押す、転がす、

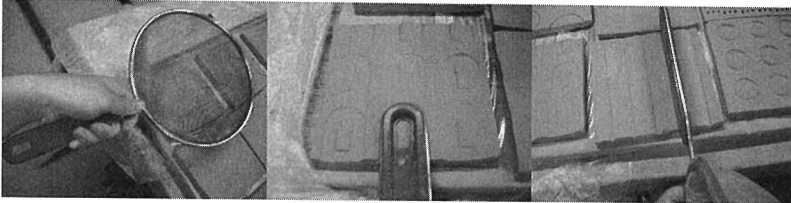


・歯ブラシ → 押す、型押し出し、



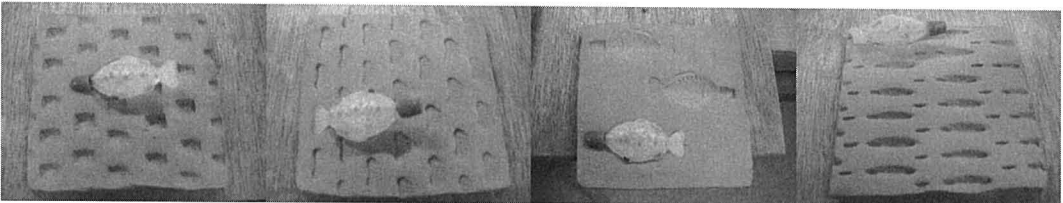
ブラシの部分はタオル生地のように見える。穴部分を押し出すと穴の粘土が残り出っ張りのあるおもしろい型ができる。

・金属ザル → 押す、

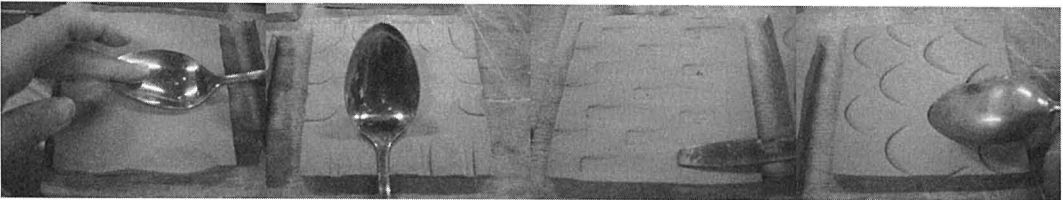


ざるの網目部分の型は厚い布を押した跡と似ている。

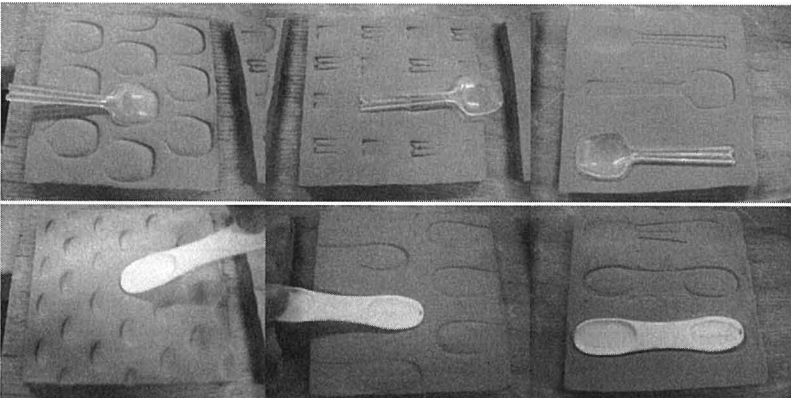
・醤油入れ → 押す、



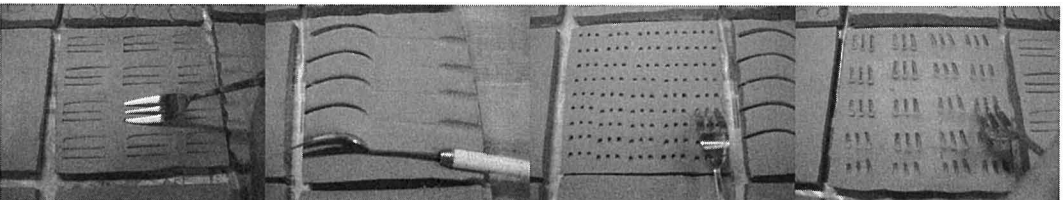
・スプーン(金属) → 押す、

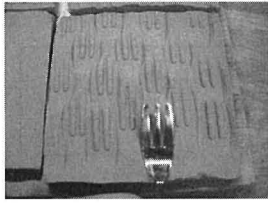


・スプーン(プラスチック) → 押す、



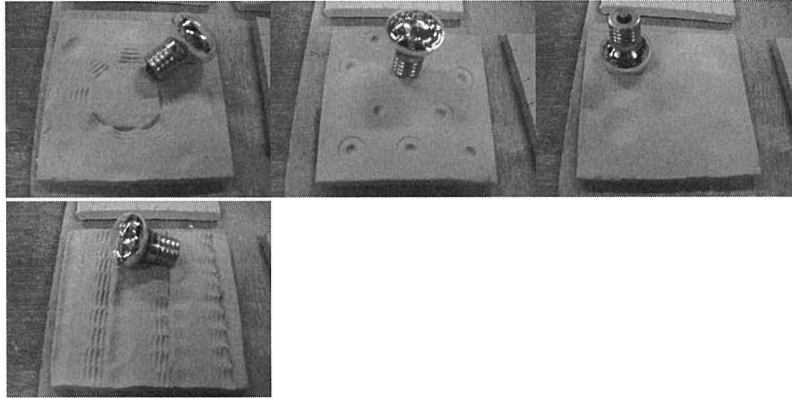
・フォーク → 押す、刺す、引きずる、





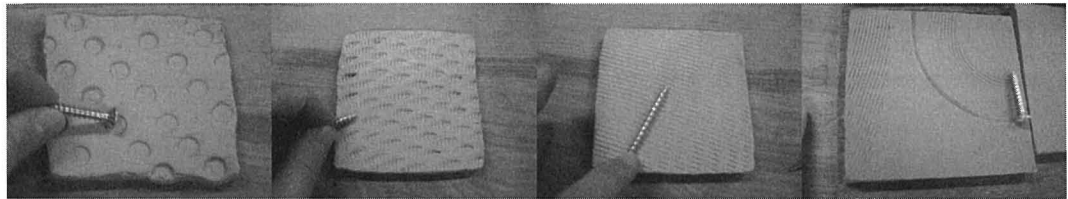
先端の尖った部分三点が規則的にそろっている。

・電球 → 押す、転がす

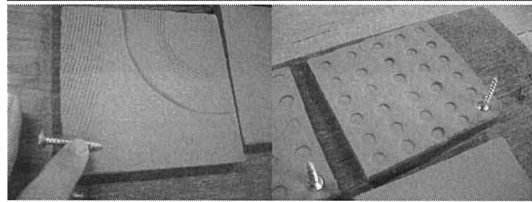


電球を横に押すとねじの部分によって独特な型になる。丸い部分を押しなめらかなくぼみができきれいである。

・ねじ(大、中、小) → 押す、刺す、転がす

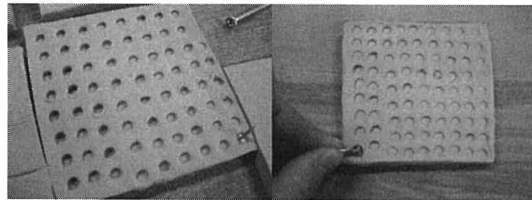


横に転がすと綺麗にそろった斜めの縞模様ができる。頭を押すと十字の模様が入った。



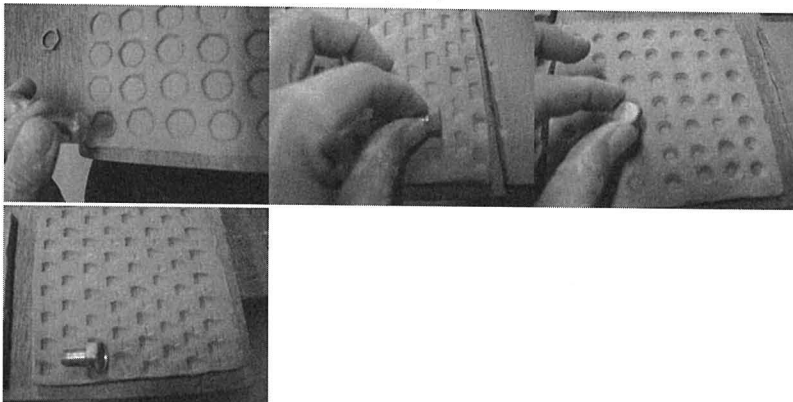
先端を粘土版にねじって入れると穴がねじの形そのままになる。

・くぎ → 押す、刺す、



頭の部分の大きさによってできる型の大きさが違ってくる。

・ボルト → 押す、転がす、刺す、



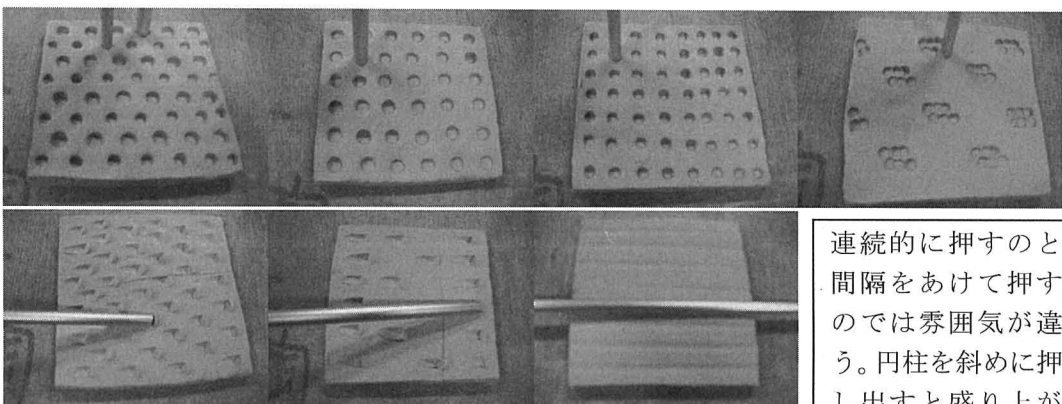
横に倒して頭の尖った角の部分を押すと尖ったくぼみができて面白い。先端を斜めに押すとねじれている部分が型として出る。

・装飾用タイ → 刺す、押す、



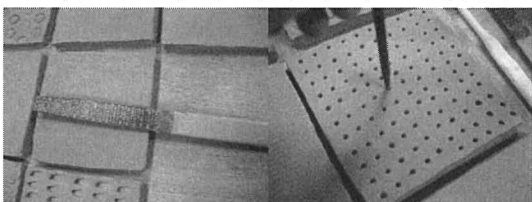
横に押し付けるとランダムな模様出来る。弱いので、押しつけることが難しい。

・アルミ棒 → 押す



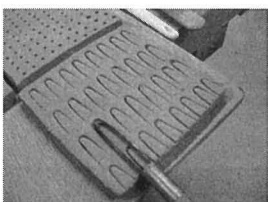
連続的に押すのと間隔をあけて押すのでは雰囲気が違う。円柱を斜めに押し出すと盛り上がった模様になる。

・金属やすり(先端が丸、平ら) → 押す、刺す、

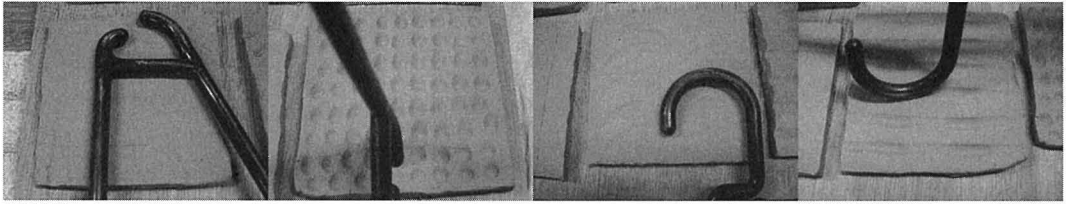


表面のごつごつした模様が出る。

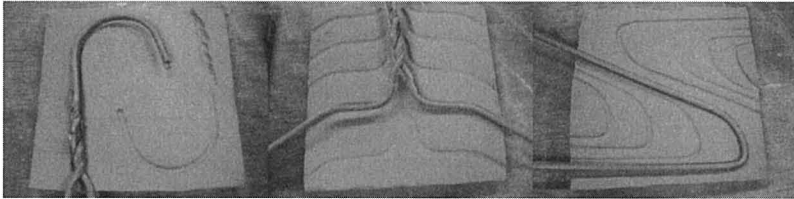
・削りカンナ → 押す、



・ハンガー(プラスチック) → 押す、

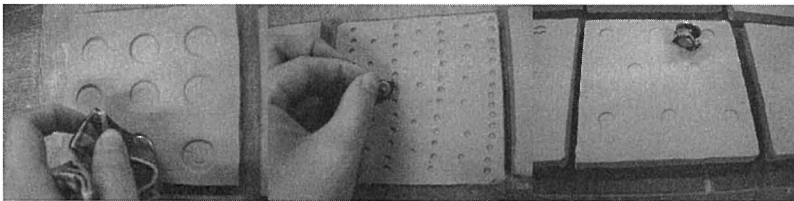


・ハンガー(金属) → 押す、



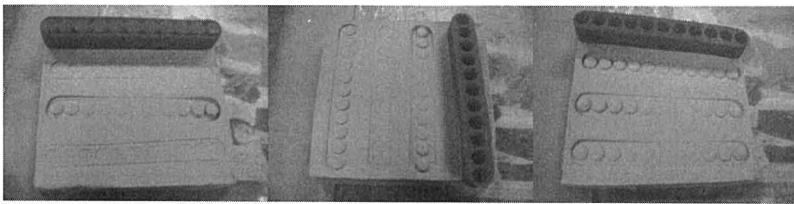
大きく形が変えづらいので平らなものには押しやすいが、曲面のものには向かない。

・ジーンズのボタン → 押す、



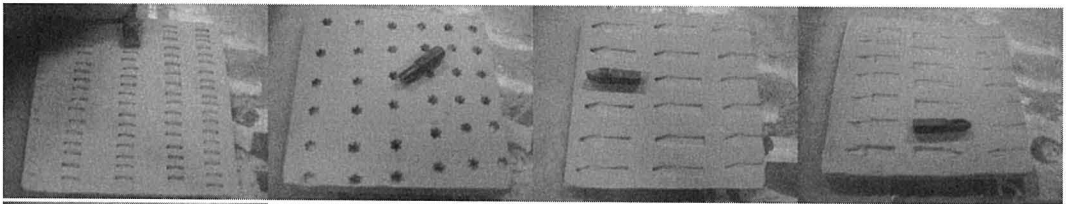
文字のあるボタンの型は文字が出て面白い。ボタンは種類が多いため、組み合わせるとパターンが増える。

・ドライバーケース → 押す、



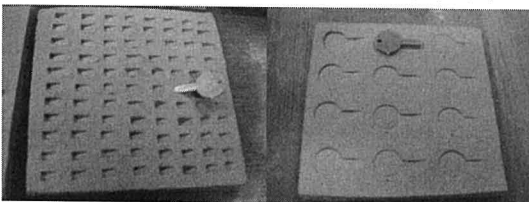
ドライバーの先端部分をいれるケース。

・ドライバーの先 → 押す、刺す、



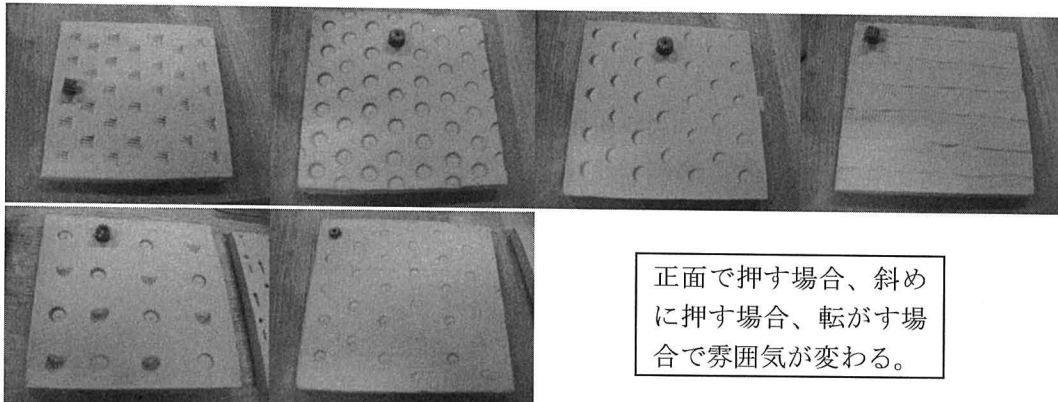
十字、マイナス、花の形をしている。

・ユニットはずし治具 → 押す、刺す、

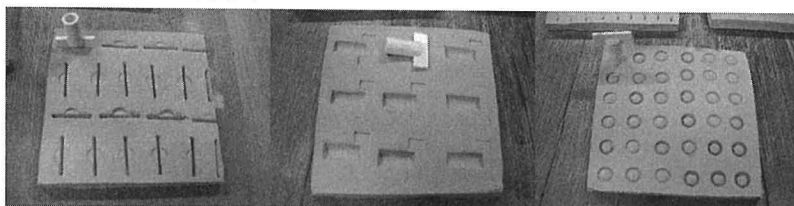


鍵のように見える。全体を押すのと、先端部分だけ押すのでは全く違う型になる。

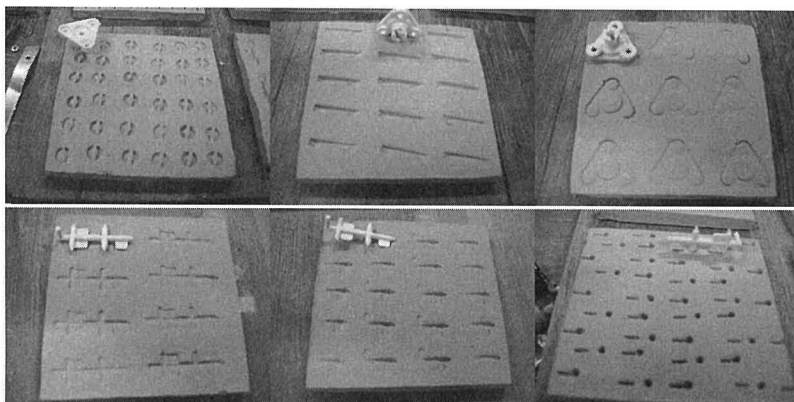
・ギア → 押す



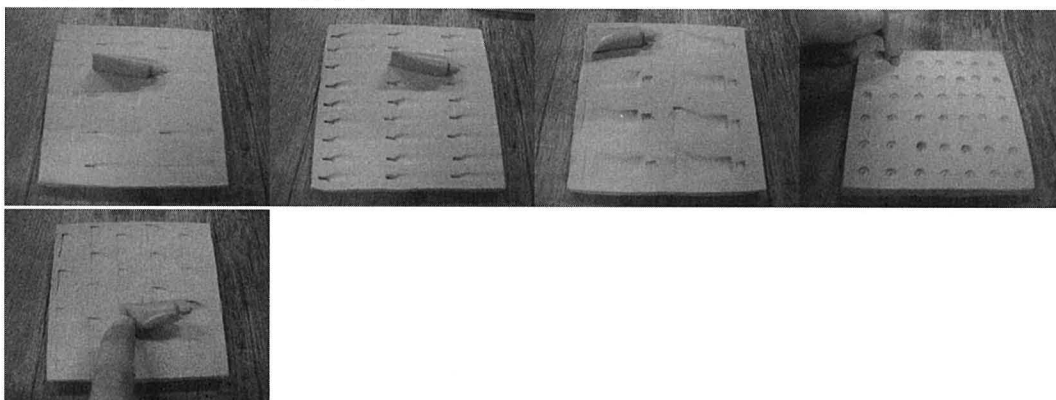
・レンチ → 押す、



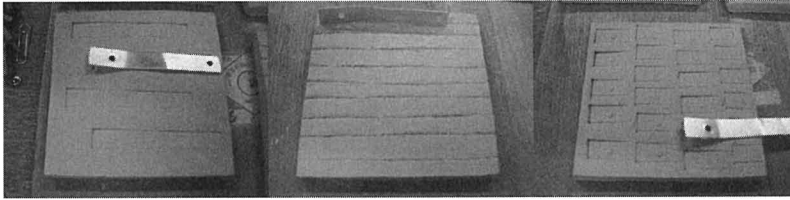
・ホイールハブ → 押す、



・小さいチューブ → 押す、

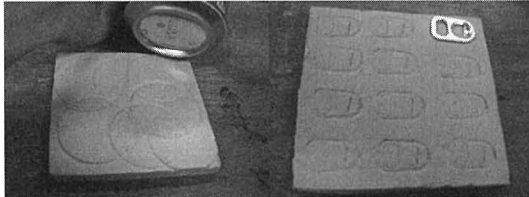


・アルミ板 → 押す、刺す、



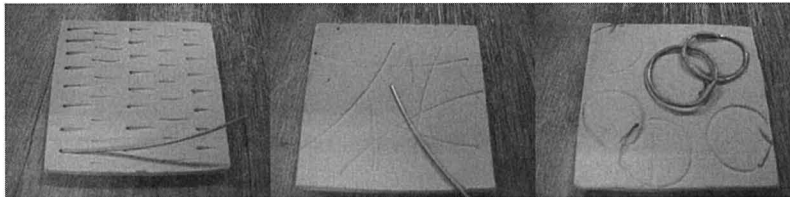
アルミ板は切り口がギザギザなので押すと面白い。

・アルミ缶とプルトップ → 押す



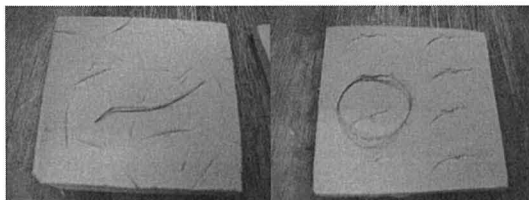
プルトップは独特な形をしており、変形させて型を作ることができる。

・針金(太) → 押す、



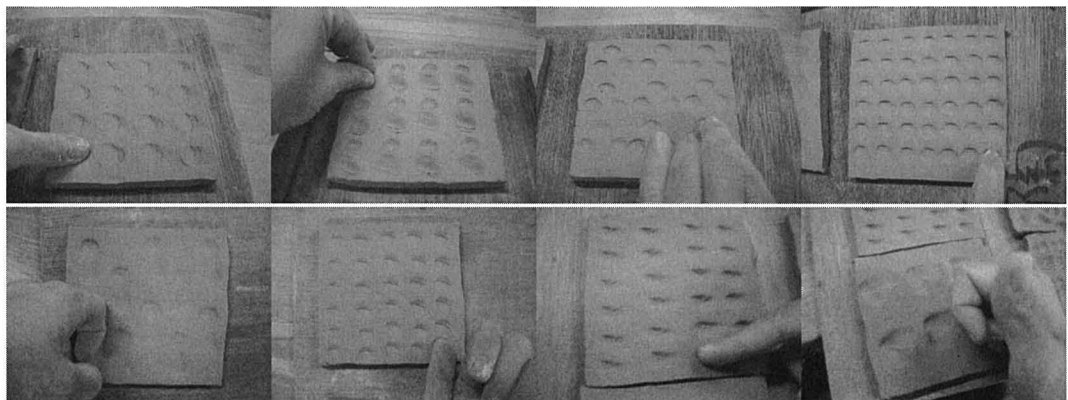
針金は加工することによって自由に形を変えることができるので様々な表現ができる。

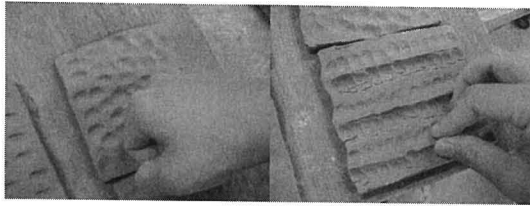
・針金(細) → 押す、



③ 手で行う加飾

- ・つまむ
- ・つめのあとをつける
- ・こぶしの型をつける
- ・指の跡をつける





手を使った表現は物を押し
たものと違った表現になる。
手を使うと表現方法をいろ
いろ考えることができる。

おわりに

テストピースを作成するにあたって、技法で気をつけなければならない事がいくつか分かった。一つ目は、テストピースの粘土板に型を押すとき、適度な力で押さなければいけないことである。押す力が強すぎると、粘土が割れてしまったり、穴を開けてしまうことがある。二つ目は、テストピースの粘土板を乾かす期間に粘土にひびが入ることである。はっきりとした原因は分からないが、型を押さえつけたことによって、粘土の厚みが異なり、乾燥する際の粘土の収縮率が違ってくるためこのような現象が起こるのではないかと思う。

実際に作品に型押し技法を施す場合のことを考えると、作品の表面が曲線のものとは平面のものとは違いが出てくる。平面のものは、上で述べたことに気をつければよいが、表面が曲線の場合、曲面に沿って型を押していかなければいけない。そのため、型押しに向くものとそうでないものに分けることができる。実際に作品に応用する前に、型押しに向くかどうか試す必要がある。

加飾パターンの可能性としては、二種類以上の型を用いて加飾すること、同じ型をたくさん押すことが考えられる。また、素材を変形させるなどして型を作るとパターンを無限に作る事が可能である。型でなく手を使って装飾を行うことも一つの方法である。手や指を使うと、つまんだりのぼしたりなど道具を使った場合とは違う表現ができるので、バリエーションの可能性が広がる。これらのことから手を使って行う加飾について、もう少し調べていこうと考えている。

加飾を身近な道具やものを使って行えば、授業に活用しやすく、児童生徒に普段使っている何気ないものでも様々な使い方に気づかせることができる。また、作品に加飾を行うことで新しい表現ができるのではないかと感じた。

さらに、型押ししたものに施釉すると、デザインがより一層強調される。釉をかけると、凹凸部分の縁が何種類か違った色に変化して柔らかい感じに仕上がりと、酸化物をかけると刻印の溝に酸化物が入り、模様を浮き立たせる効果があるといわれている。

これらのことから、テストピースに釉や酸化物をかけ、その効果についても試してみたいと考えている。

これからは、ここで述べたことに気をつけ作品に生かしていこうと考えている。

参考文献

- ・『装飾とデザイン』 山崎正和著 中央公論新社
- ・『大辞林』 松村明著 三省堂
- ・『陶芸技法の手引き』 トニー・パークス著 グラフィック社